

運動遊びにおける保育実践力に関する研究

～フィンランドの事例と体育系授業の実践から～

A Study about the Professional Abilities of Early Childhood Care and Education

During Physical Play

— From A Finnish Case and the Practice of Physical Education
in the Childcare Workers Course —

柴 田 卓*

Suguru Shibata

The purpose of this study was to verify the professional abilities of early childhood care and education during physical play. It is considered from two viewpoints. One is the reflection on physical education in our child-care workers course. Another point is the consideration of the physical play and exercise of preschool in Finland. The results of the reflection about the physical education class confirmed the constant effect. However, during the teaching practice, student's reflections were not being utilized. On the other hand, from the Finnish case, we could see the proper way of the exercise and physical play in preschool. In the future, it will be challenge to develop a method for evaluating the professional abilities of early childhood care and education during physical play.

1. はじめに

世界保健機構(WHO)をはじめとして、多くの国々では、幼児を含む子どもの心身の健康的な発達のために「毎日、合計60分以上の中強度から高強度の身体活動」を推奨しており¹⁾、日本においても文部科学省がガイドブックを発行して幼児期の運動を推奨している。さらに、東日本大震災で被害を受けた福島県や宮城県の沿岸部では、子どもの運動不足や肥満の問題が顕著^{2) 3)}となり、幼児期から身体活動を習慣づけることが必須の課題となっている。

このような現状の中で、60分以上の身体活動を毎日実践することを想定した場合、これまでに以上に運動遊びを広く深く学び、それを実践できる力のある保育者を育成することが保育者養成の課題である。

2016年4月より、筆者らは上記の課題を改善するために、福島県及び宮城県の保育者養成

* 幼児教育学科

校教員とプロジェクトチームを結成した。このプロジェクトは4大学で約400名の学生を対象とした継続的な調査を実施するものである。はじめに各大学で実施している授業からサンプルを収集してモデルケースを作成する。また、諸外国における研究や実践の調査および比較検討を行う。そして、統一した振り返りシートを活用した学びの検討、ルーブリックをはじめとした実践力を評価する方法を検討する。同時に、実践力を実感するための実習やフィールドワークとの連携や保育関連授業との連携など、様々な視点から保育実践力の向上を検討していく計画である。本研究は、諸外国の事例としてフィンランドの実践と、筆者が授業内で実施している振り返りシートの検討および考察から、運動遊びにおける保育実践力を検証することが目的である。同時に上記プロジェクトにおける予備調査として位置づけた研究である。

2. 研究方法

(1) 本研究における保育実践力

これまで保育実践力に関しては、多岐にわたり多くの研究が行われている。本研究における保育実践力は、松山⁴⁾⁵⁾の「実習園やその場の子どもを観察し、関係をつくる力を前提とした、①保育案の作成能力、②作成した保育案を実践する技術力、③保育を実践し、反省し、次の活動に活かす課題を見出す力」を根底に据え、運動遊びにおいてこれらを発揮・展開できる力と捉えている。

(2) 保育者養成における体育系授業の実践

はじめに、本学幼児教育学科の保育表現技術体育Ⅰにおいて、振り返りによる学生の主体的な学びを可視化するために実施しているシートの概要を説明する。次に、サンプルとして2名の学生のシートから主体的な学びを抽出し、考察を加える。最後に、最終授業において実施したアンケートの概要および結果について考察を加える。ノートの使用に関しては、匿名であることを説明し、使用の許可を得ている。学生もまた、より良いノート作りのために改善に参加している。

① アンケートの対象

対象は、本学幼児教育学科の「保育表現技術体育Ⅰ」(通年)の受講生であり、平成27年度は120名である。毎回授業で学習したことを、授業後にワークシートにまとめ、実習・現場で活用できるノート作りを義務付けている。アンケートに関しては、5件法及び自由記述で7問の質問を設定した。ヒアリング調査に関しては、教育実習後の学生10名に対し、運動遊びの実施状況、運動遊び指導を実施する際の難しさ、ノートは事前準備で参考になったか等のヒアリングを行った。

②アンケートの内容

1. 将来役に立つ運動遊びノートを作成することができた
 2. 質問1の理由を自由記述で教えてください
 3. 平均、ノートを記入するタイミングはいつですか(授業日・1週間以内・提出前にまとめて記入)
 4. 平均してノートを書く時間はどれくらいですか(10・20・30・40・50・1時間以上)
 5. ノート記入で苦勞した点は、何ですか(自由記述)
 6. ノートの記入で一番重要だと思うことは何ですか
(学習したことを振り返る・指導案作成の各練習・将来見直して活用できる・1年間学習した成果物)
 7. より良いノートを作成するために改善すべき点や思うことは何ですか(自由記述)
- ※本アンケートは、1年の振り返りとして授業内で実施したもので、シートの改善に役立てること、その一部を研究で使用することを事前に説明している

③ヒアリング調査の内容

ヒアリングの対象は、上記と同様であり、教育実習(幼稚園)後の学生10名(ゼミの学生)に対して実施した。運動遊びの実施状況、実習において運動遊び指導を実施する際の難しさ、ノートは事前準備等で参考になったか等を半構造化面接法でヒアリングした。

(3) フィンランドの実践

2016年8月12日にフィンランドのノキア市にある保育園PUROPUISTON PÄIVÄKOTIを調査訪問した。ここでは、フィンランドの保育園における「運動」の実践に関する調査から、その一部を報告する。なお、上記保育園への訪問は、他の調査でも数回訪問しており、研究に対する理解及び協力に関し良好な関係を築くことができています。従って、事前に訪問する際の撮影および教員へのインタビュー、データの使用に関して承諾を得ている。言語に関しては、現地の言葉(フィンランド語)でインタビューを行うため、通訳およびコーディネーターとして、ニエメラ・ペトリ氏に依頼した。

3. 保育者養成における体育系授業の実践

(1) 体育実践授業における「振り返りシート」の概要

ここでは、保育内容表現における体育系授業において、振り返りシートを活用した学生の主

体的な学びに着目する。この保育内容表現における体育系授業とは、幼児体育・運動遊びとして保育者養成校で実施され、対象年齢に応じた遊びの実体験および導入・展開方法の修得がその中心に据えられることがほとんどである。筆者の経験からも、実際に遊びを体験したり、ロールプレイを通して模擬授業を行ったりすることから、学生の満足度や学生からの評価が高いことが多い。

しかし、実際に保育の現場で運動遊びを展開できる実践力が養成できているかの検証がほとんどなされていないのが現状である。そこで、学生の学びを可視化し、学生が実習や現場で活用できるノートを作ることを目的に5年前から導入している振り返りシート(ノート)を取り上げ、その内容及びアンケート結果から考察を加えることとする。

本学における授業名は「保育表現技術体育Ⅰ」であり、1年生を対象とした通年の資格必修科目である。授業の目的・ねらい・概要・評価方法は下記の通りである。

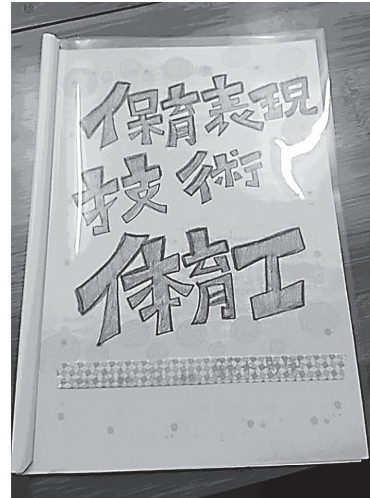


写真1 ノートの表紙

〔授業の目的・ねらい〕

- ①運動遊び・幼児体育における実際の指導や評価方法を学習する。
- ②対象年齢に応じた指導のポイントや安全面について考え、実践的なスキルを習得する。

〔授業全体の内容の概要〕

実技や講義を通して、さまざまな視点から運動の面白さを探究し、子どもが意欲的かつ主体的に取り組む運動遊びの内容や指導方法を習得する。また、対象年齢に応じた指導のポイントや安全面、環境設定を学習するために、ロールプレイやケーススタディを多く実施する。天候によって計画を変更する場合がある。

〔評価方法〕

- ①実技25点
- ②ノート50点(毎回の内容と自身の学びを必ずノートにまとめること)
- ③レポート25点

この評価方法にある②ノートがここで取り上げる振り返りシートである。評価の50%を占めることから、実技テストやペーパー試験ではなく、毎回の学びをこのノートを通して評価すると伝えている。また「絵がうまいかどうかは評価の対象ではなく、その都度しっかりと振り返り、運動遊びにどれだけ向き合ったかをノートを通して評価します」と伝えている。振り返りシートの内容は、6つの項目から構成され、①本日の内容、②本日の感想、③本日の内容を視

覚的(図や絵)に記録しよう、④ルール解説・指導方法・遊びの面白さ、⑤安全面についての学びと気づき、⑥本日の学び・気づき・疑問点(各遊びのねらい・工夫・応用)である。表紙(写真①)は、学生がこだわりや愛着を持てるよう白紙にしてあり、自由に書き込んでいる。①ではその日に実施した内容を記入し、②では率直な感想、③では実施した内容および環境構成を図や絵で示し、④では③に対して文字で説明を加え指導のポイントを記入し、⑤では実施した内容に対する安全面に関する記入、⑥では子どもの目線、保育者の目線で気づいたことと学んだことに加え年齢に応じた工夫や応用を記入するように設定している。また、グループワークや発表系の授業の際は、用途ごとにシートを配布し付け足している。シートはその日のうちに記入し、30分程度で書き上げる設定である。遊びの記録によってレポトリエを増やすだけでなく、シートの活用によって日頃から疑問を持ち、学びを実感し振り返る習慣を身につけることで、実習における日誌や指導案の作成にも活かすことができると考えている。また、授業で説明したことや体験したことを振り返ることで、保育者の視点と子どもの視点の両方から気づきや理解を深めることを意図している。さらに、授業中に説明したことをメモしたり、漏らさずに聞き取ろうという学習意欲にも繋げることができる。総体的に学生の学びを助長し、保育実践力の向上を目指した取り組みである。図1.2は学生の記入したノートの一例である。

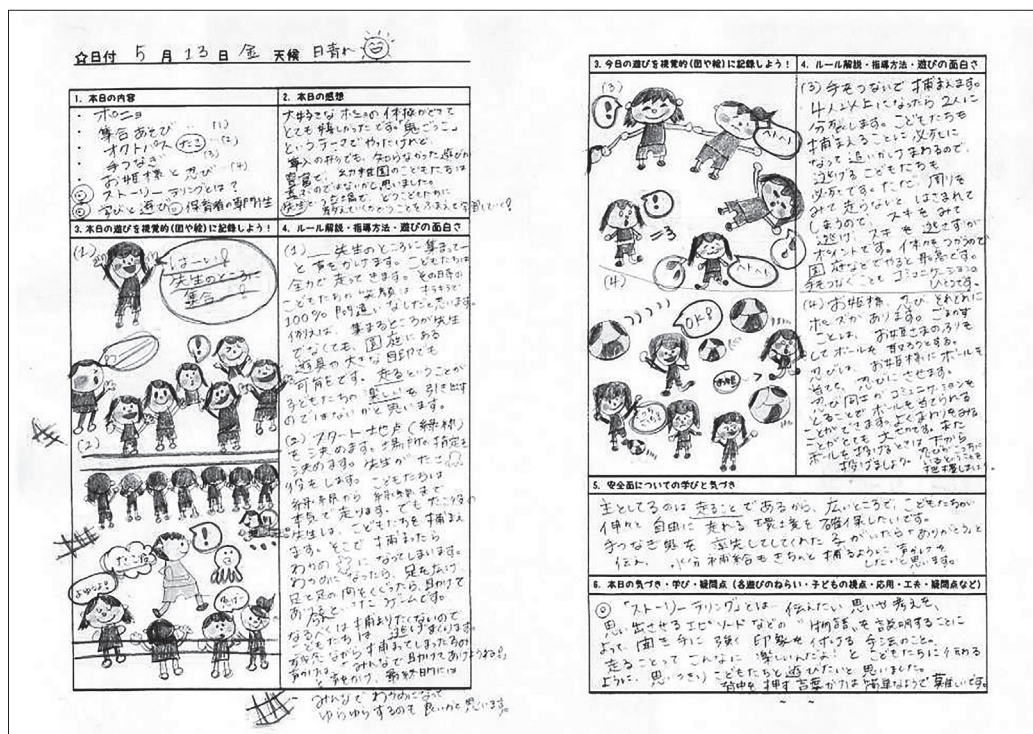


図1. 学生Aの事例

(2) 体育実践授業における「振り返りシート」の事例及び考察

学生Aの事例：⑤⑥の記述

- ⑤「手つなぎ鬼を率先してくれた子がいたら、ありがとうと伝え、水分補給もきちんとするように声掛けをしたい」という記述から、自身が保育者と鬼の立場になって振り返っていることが分かる。また、安全面から水分補給にも触れている。
- ⑥「ストーリーテリングとは、伝えたい思いや考えを思い出せるエピソードなどの物語を説明することによって聞き手に強く印象をつける手法のこと。走るこつてこんなに楽しいんだよ！と子ども達に伝わるように思いつき子ども達と遊びたいと思いました。背中を押す言葉がけは簡単のようで難しいです」と振り返っている。この日の内容は、お魚のリズム体操からはじまり、終始お魚になりきって鬼ごっこを展開した内容である。いくつかのポイントを伝えたが、その中でもお魚になりきるためにストーリー仕立てでルールを説明すると子どもたちもお魚になりきり、楽しく遊ぶ事ができるなどの解説を行った。学生Aはそのことを記憶し、自主的にストーリーテリングについて調べてまとめている。授業におけるキーワードや疑問、興味・関心について調べてまとめるこの過程は、昨今普及しつつあるアクティブラーニングと捉える事ができる。また、言葉がけの難しさについても触れていることから、自身の習得すべき課題を自覚しているといえよう。

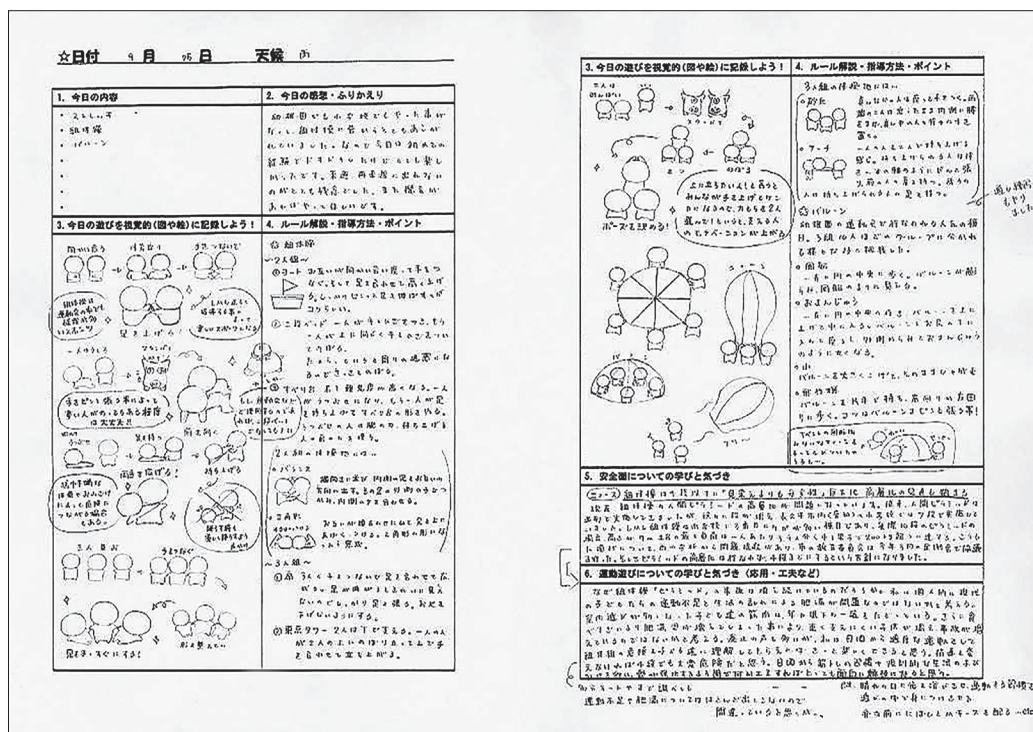


図2. 学生Bの事例

学生Bの事例：⑤⑥の記述

この日は運動会種目の練習に入り、組体操とバルーンの内容である。学生Bは⑤の安全面についての学びと気づきにおいて、偶然ニュースで取り上げられた組体操ピラミッドの事故についてまとめている。また、⑥では「なぜ、組体操ピラミッドの事故は増え続けているのだろうか」という課題を抽出し、「子ども達の運動不足と生活の乱れによる肥満が問題」と、自分なりの原因をあげ、「日頃から適度な運動をして～」と、改善策を述べている。このように、授業で学習した内容を、インターネット等で調べて自分なりの答えを導き、整理している点に関しては理想的な学びと言える。また、その後の学習で正しい知識や対処法などを学び、書き直すこともできる点においては、こうした振り返りを習慣化させる仕組みとしてのシートは学生にとって有意義な取り組みと言える。しかしながら、受講した学生の全員がこうした主体的な学びに繋がっているとは限らない。今回取り上げた事例は、ほんの一例であり、意欲や学びに対するバラつきがあることも事実である。そこで、次に1年間を振り返っての学生の意識を調査するために実施したアンケートについて、結果とその考察を提示する。

(3) アンケート結果および考察

平成27年度の学年末に実施したアンケートの結果が表1～6である。表1は、1年を振り返って実習・現場で役立つノートを作成することができたかという満足度に関する設問である。「強くそう思う」と「そう思う」を合わせると全体の90%以上を占め、概ね実習や将来の現場で役に立つノート作成ができたという実感があることが分かった。しかし、「強くそう思う」は27%と予想外に低い値であった。設問2は、設問1に対する理由(自由記述)であり、ポジティブな内容を整理したのが表2である。指導案作成で役立つは28ポイント、説明やポイント

表1. ノート作りに対する満足度 (n=120)

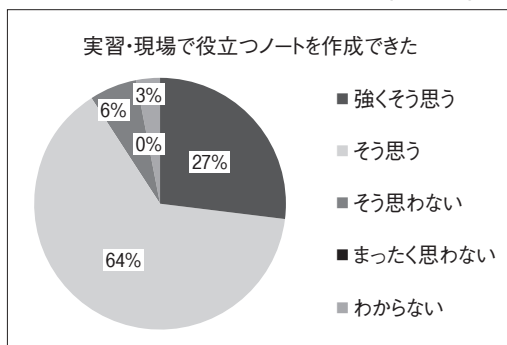


表2. 設問1に対するポジティブな理由

ポジティブな項目	(n=76)
将来、実習・現場・指導案作成で役立つから	28
教員の説明やポイントを詳しくまとめることができた	16
遊びのレパートリーを増やすことができた	9
絵やポイントの色付けなどをこだわったから	7
全部書いた、がんばった	5
授業内容を振り返ることで、理解を深めることができた	5
安全面に関して、深く理解できた	3
一つの遊びをいろいろな視点で見れる	3

を詳しくまとめる事ができたが16ポイント、遊びのレポートリーが増えたは9ポイントであった。一方、ネガティブな内容は、「もっと詳しく、分かりやすく書けばよかった」が10ポイントであり、それ以外は少数であった。

表3は、ノートを記入するタイミングに関する設問であり、その日のうちに振り返りを行いワークシートに記入することを義務付け、度々声掛けを行っていたにもかかわらず、「その日のうちに記入した」は全体の14%にとどまり、「提出前にまとめて記入した」は全体の42%であった。授業内で記入する時間を増やしたり、ノートに記入すべきポイントを板書したりするなど様々な改善が必要であることが明らかとなった。

表4はノートを記入する平均時間についての設問であり、30分が34%、40分が24%であり記入する時間に関しては、設定した時間に近い数値となった。80%以上が30分以上かけて振り返りシートに記入していることになるが、表3の結果からもわかる通り提出前にまとめて記入した場合は、毎回の記入なのかまとめて書くための時間なのか不明である。

表3. ノートを記入するタイミング (n=120)

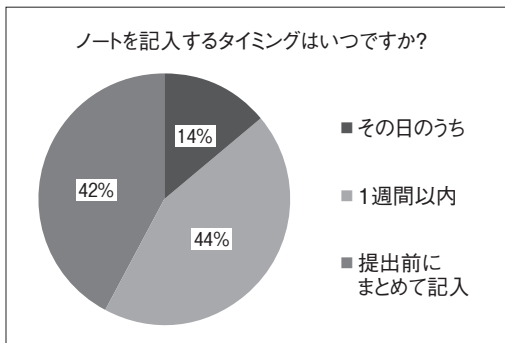


表4. ノートを記入する平均時間 (n=120)

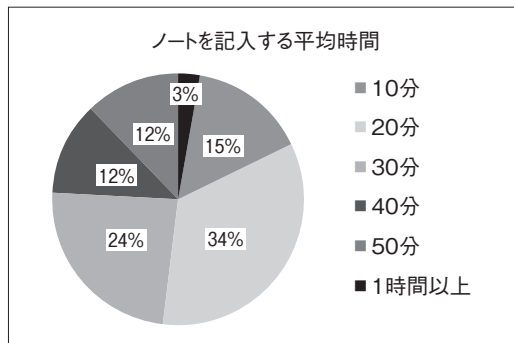


表5. ノートを作成する上で一番苦労したこと (n=82)

項目	(n=82)
絵やイラストで表現すること	51
思い出すこと・忘れてしまったこと	9
指導方法・ルール・説明・ポイントを書くこと	9
学びと気づき・応用を書くこと	5
安全面を考慮すること	2
プリントのコピー	2
溜めてしまうこと	1
書く量が多いこと	1
全部	1
欠席した際に友達から見せてもらう時	1

表6. ノートの意義付けに関する設問 (n=120)

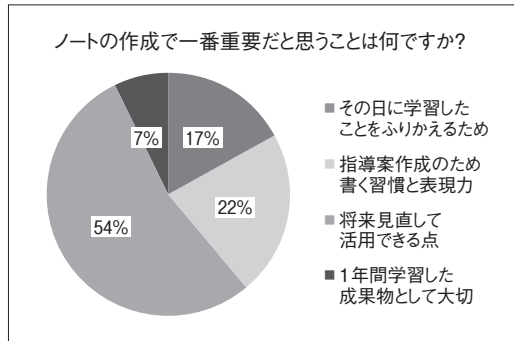


表5は、振り返りシートの記入において一番苦勞した点は何かという設問(自由記述)である。絵やイラストで表現することが51ポイントと最も多かった。次に思い出すこと・忘れてしまったこと(授業で学習したことを)が9ポイントであった。指導方法・ルール・説明・ポイントを整理して書くことも苦勞した様であり、同じく9ポイントであった。これらの結果から、絵やイラストで表現したり、ルール等を分かりやすくまとめたりする難しさに直面したことが分かる。この整理して書いたり、図や絵で表現したりする力も指導案作成やその際の環境構成など、保育者として必要な実践力である。表6はノートの作成で一番重要だと思うことは何ですかというノート作成の意義付けに関する設問である。設問2と重複するが2年次の本実習に向けて、ノートの活用を促すよう意識づけおよび誘導するための質問として設定している。予想通り将来見直して活用できるが54%、指導案作成のための書く習慣と表現力が22%であった。これらの結果から振り返りシートを活用した実践が、実習の事前準備や実習中の指導案作成に大きく貢献すると期待していた。

(4) ヒアリングの調査結果と考察

アンケートの結果から、この振り返りシートを活用した実践は、概ね満足度も高く、実習や現場で活用できるという意義付けもあることから、幼稚園教育実習後に下記内容についてヒアリングを行った。「実習期間中(部分または総合)にリズム体操を含む運動遊びを実施しましたか」という質問に対しては、10名中1名のみが実施したと回答した。さらに、「ノートを参考あるいは活用しましたか」という質問に対しては、参考・活用したと回答した学生は0名であった。「実習で運動遊びを実施する際の難しさは何ですか」という質問に対して、「実習生という立場でホールを使用しにくい」、「週1回、外部運動講師が来る中であえてやろうと思わない」、「教室の中は、走ってはいけない、加えて子どもが多い」、「運動というリスクを冒すより、無難な製作の方が楽である」といった回答である。さらに「ピアノの課題曲の様に指示されないとやりづらい」などの意見があった。

これらの考察から、毎回の振り返りを通して将来的に役立つノートを作る工程が保育実践力に繋がることを目指してきたのだが、学生との対話を重ねることにより実習においては、必ずしも役立つあるいは実践に繋がるとは言えないことも見えてきた。つまり、運動をどのように保育に取り入れるか、あるいは実習先の園で取り入れているかによって、大きな差が生じていることが明らかになった。次に、運動および運動遊びを保育に取り入れる事例として、フィンランドの実践からアプローチする。

4. フィンランドの事例からの検討

筆者は、2009年より北欧諸国の保育者養成及び保育実践に着目して、デンマーク・フィンランド・スウェーデンを視察している。その一部は、柴田2016⁷⁾で、自然の持つ教育力を保育に活かした事例として報告している。ここでは、「2016年の教育改革を受けて、保育カリキュラムへの影響と実践をリサーチする」というテーマで現在調査中のフィンランド研究から、特に運動に着目して報告を行う。

フィンランドにおける今回の教育改革では、主に3つのテーマが設定されている。①「事例に基づいた教育制度」を導入する②生徒自身がともに授業を計画する③共同作業に重点を置くの3つである。そこで、2015年より視察で訪問しているフィンランドのノキア市にある保育園PUROPUISTON PÄIVÄKOTIの事例を取り上げる。特に今回は、運動の実践およびそれらに対して上記テーマがどのように関連しているかについて着目した。はじめに、5歳児と4歳児クラスのスポーツの時間を見学し、担任にインタビューを行った。

運動の頻度はどれくらいか？課題や内容の設定の仕方はどのようにしているか？

週に1度、運動場(体育館)で行う。それ以外は外遊びや普段の遊びの中で2時間、運動の要素を取り入れている。大きな枠組みはあるが、子どもが決定に参加する。先生も提案を行い、子どもの反応や意思を大切に決定する。今回の改革から特に子どもの意思を受け入れ、汲みとらなければならなくなっている。運動に関しては、1日2時間の運動要素を取り入れるよう工夫している。はじめは運動を怖がっていたりしたが、運動が上手になってきた実感がある。子どもが試しながら、遊具や課題を配置・設定している。

上記のように、フィンランドでは日本の2倍にあたる2時間の運動を取り入れることを推奨している。詳細は別の機会でも報告するため割愛するが、そのための研修制度や日本の専門学校にあたる施設が保育士向けの短期講座を開設するなど、具体的な取り組みが始まったところである。その中でも注目すべきは、「子どもが決定に参加する」とある通り、運動においても、カリキュラムや内容を子ども達が決定している点である。

写真2～5は、5歳児のスポーツの様子である。一見すると日本でも当たり前に行われているサーキット遊びの様に見える。しかし、この遊びは、子ども達と対話し、子ども達のやりたいことなどを汲みとって構成した結果、このようなスタイルになったという。筆者が幼児体育指導者として現場で指導をしていた際は、年間カリキュラムと指導案を作成し、担任と相談



写真2 教員と子ども達



写真3 運動場の様子

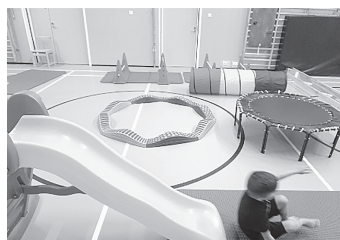


写真4 アクティビティの一例



写真5 整理体操とマッサージ

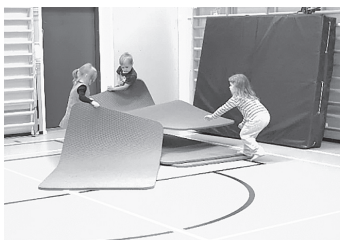


写真6 後片付けの様子



写真7 後片付けの様子

して実施していた。年齢やクラスの様子は考慮したが、最善と思われる内容を大人が考えて指導していた。この園では、自分のやりたいことを表明し、大人との対話や子ども同士の対話によって子ども達が決定に参加するという点において、大きな違いがある。写真3の手前はサッカーコートであり、サッカーだけをしてこの時間を終える子どももいるというが、それ自体は問題ではなくその子たちを見てサッカーをやってみたいと興味・関心を示し、参加する子がいれば良いとのことである。まさに、「生徒自身がともに授業を計画する」というテーマに直結した事例である。写真5は、1時間程度のスポーツの最後に実施される整理体操とマッサージであり、子ども達とスキンシップを取るために大切にしているという。1日の保育の中に2時間の運動の要素を取り入れることは、かなり高い目標設定のように感じたが、今回設定した遊具を器具庫から出して準備することや、写真6、7のように後片付けを行うことも運動と捉えているとのことである。これらのつかむ・持ち上げる・運ぶという動作は、操作性といわれる運動(動作)であり、示唆に富む事例である。また、これらは教育改革の3つ目のテーマである共同作業にも該当している。

このように改めて保育の中で、スポーツや遊び以外に着目し、運動の要素を取り出して意義付けすることも重要な視点といえよう。

次に、運動の要素を園生活に取り入れている事例の紹介である。

この保育園を視察する際に着目したのが、写真8のように廊下に置いてある遊具である。バランスボールやフラフープなど、意図的に運動を取り入れようとしている点分かる。しかし、廊下は走らない・騒がないという日本人の感覚からは、少し理解しがたい光景であるが、斬新



写真8 廊下にある遊具



写真9 ジャンプ

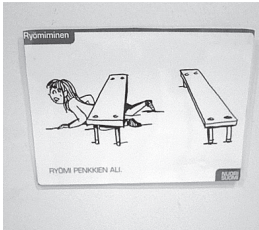


写真10 くぐる



写真11 ブリッジ



写真12 手形足形



写真13 タッチ

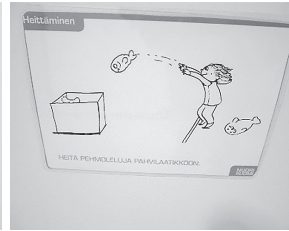


写真14 スローイン



写真15 ターン



写真16 乳児の様子

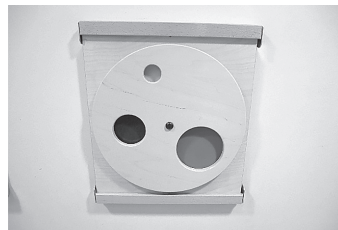


写真17 木製の遊具

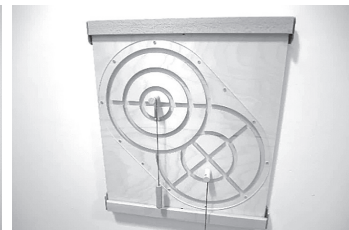


写真18 木製の遊具②

で合理的な取り組みともいえる。その他にも写真9～15の様に動きと指令が書いてある絵がいくつも廊下に貼られていた。これらはジャンプ・くぐる・投げるなどの動作の課題であり、運動を推進するための工夫である。スウェーデン視察の際、園庭に同じような課題が物語風に飾られていたのは確認したが、施設内でしかも廊下に貼ってあるのは初見である。また、写真16～18の様に、乳児が指先の感覚を使って遊べる木製の遊具がいくつも廊下に取り付けられていた。

こうした園庭やホールでの運動以外にも生活や環境を工夫することで運動を取り入れ、その習慣化や意識づけが行われている事例は、生活そのものも運動の対象にするという点において、非常に示唆に富む内容である。このような海外の事例から、日本において踏襲されてきた幼児体育・運動遊びの実践について、一度立ち止まり、改めて意味づけや価値づけを行うことが必要であろう。これらの視点から体育系実践授業においても学生との対話を軸にしながら遊びや運動を捉え、現場で展開できる実践力を育成することの重要性を再確認することができた。さらに、こうした新たな内容を取り入れるために、幼児体育・運動遊び系の実践授業だけでなく、音楽・造形・環境・実習指導などの授業と連携し、フィールドワークによって実践することで、

学生の主体的な学びをより深めることができるであろう。今後も、海外との比較検討を行いながら運動遊びにおける保育実践力について、多角的に調査研究を進めたい。

5. まとめ

本研究は、保育者養成における体育系授業におけるワークシートを活用した振り返りの実践から、学生の主体的な学びの様相とその効果について検証を行った。ワークシートを活用して主体的に振り返る機会を作ることで、将来の保育現場で見直して活用できるようなノートを作成することができた。総体的な満足度は高かったが、意図に反してまとめて記入した学生が多いことも明らかになった。改善点として、ホワイトボード、スマートフォンの有効活用やメモを取る時間の設定、声掛けの徹底等が考えられ、その内容の充実を図りたい。また、実習に着目すると、ノートが活用されていないだけでなく、実習で運動遊びを実施する際の課題も見えてきた。その上で、他の教科や実習事前指導などと授業間連携によって振り返りシートを活用する機会を意図的に増加したり、フィールドワークやボランティアなどを通して運動遊びを実践できる機会を意図的に提供したりすることも必要であろう。

一方、フィンランドの事例からは、既存の幼児体育・運動遊びの枠組みを超える柔軟性を示唆するものであった。冒頭で触れたように毎日60分以上の運動を取り入れることを想定した場合、体育としてではなく生活に運動を取り入れている実践は、これから保育者を目指す学生や現場の保育者にとっても貴重な事例である。

今後は、運動遊びにおける保育実践力を評価する方法の開発をはじめ、多角的に研究を進めながら、専門性の高い保育者の養成に努めていきたい。

引用・参考

- 1) 文部科学省. 幼児期運動指針策定委員会 (2013). 幼児期運動指針ガイドブック. P10
- 2) 安江俊二 (2014). 東京電力福島第一原発事故の前後における福島県肥前傾向児の変動 (第1報). 会津大学短期大学部研究年報71
- 3) 安江俊二 (2015). 東京電力福島第一原発事故の前後における福島県肥前傾向児の変動 (第2報). 会津大学短期大学部研究年報72
- 4) 松山由美子 (2008). 保育者養成における「保育実践力」育成のためのカリキュラムの構成と評価. 四天王寺大学紀要第48号
- 5) 松山由美子 (2009). 保育者養成における「保育実践力」育成のためのカリキュラムの構成と評価 (2) - 「理論と実践の融合」についての一考察 -. 四天王寺大学紀要第48号
- 6) 柴田卓 (2016). スウェーデン・デンマークの保育環境に関する一考察. 郡山女子大学紀要 第52集. P197

付記

本研究は、その一部を日本幼児体育学会第12回大会で発表した。